

## 韓国国立ソウル聾学校との国際交流 ～3年間の取り組みを通して～

有馬 里佐・太田 康子・西分 貴徳  
徐 基弘（韓国国立ソウル聾学校）

本校中学部では、2013年度より韓国国立ソウル聾学校との教員間での交流を始め、2014年度より生徒同士のオンライン交流を始めた。お互いの自己紹介や学校紹介、文化の紹介を行う中で、言語や文化の異なる相手に伝えるために工夫をしたりコミュニケーション手段について考えたりすることができた。3年間の国際交流を通して、どのように生徒たちの取り組みや国際交流への意識が変化したのか、また、どのように教員間の情報交換や交流に向けての準備等がなされたのかを報告する。

キー・ワード：国際交流 オンライン交流 コミュニケーションの工夫 相互文化理解

### 1 はじめに

筑波大学附属学校では、①幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にすることを養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う、②教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のためにできることを考える。という2つの共通コンセプトのもとに、児童生徒及び教師の国際交流活動を推進している。それに基づき、本校中学部では、「伝え合うための英語を含めた表現・コミュニケーション能力の向上」、「異なる言語や文化を学ぶと共に、日本語や日本文化を見つめ直すこと」、「海外の聴覚障害中学生との交流体験」を目的として、2014年度より韓国国立ソウル聾学校（以下、ソウル聾学校）中学部とのインターネット無料通話スカイプを用いた交流学習を行っている。

### 2 交流学習に向けた取り組み

2013年からの3年間で、本校からソウル聾学校へ計3回訪問した。第1回目は、2013年11月に本校校長と中学部教員2名の計3名が訪問し、オンライン交流の打診と学校見学を行った。第2回目は、2015年2月に本校副校長、主幹教諭、中学部教員2名の計4名が訪問し、2014年度の交流のまとめと次年度の交流についての協議をした。第3回目は、

同年6月に本校校長と副校長が訪問し、両校の交流協定を締結した。



図1 交流学習についての協議の様子



図2 ソウル聾学校との交流協定締結

交流学習は中学部1年生同士で年に2回（1回目は自己紹介と質問、2回目は担当学年が計画）、実施し、それに向けての教員間の情報交換や準備等は電子メールやスカイプを用いて行った。

表1 これまでの交流学習の流れ

時期	内容	形態
2013年11月	第1回目ソウル聾学校訪問	学校訪問
2014年3月	2014年度の交流計画提案	電子メール
7月	韓国の話(筑波大学院留学生)	授業
	自己紹介のやりとり	電子メール
8月	スカイプ接続確認	スカイプ
	質問内容の事前確認	電子メール
8月	2014年度1回目の交流	スカイプ
9月	2回目の交流計画提案	電子メール
10月	学校紹介のやりとり	電子メール
11月	文化祭での発表(日本と韓国)	展示
12月	スカイプ接続確認	スカイプ
12月	2014年度2回目の交流	スカイプ
2015年2月	第2回目ソウル聾学校訪問 2014年度3回目の交流	学校訪問 スカイプ
3月	2015年度の交流計画提案	電子メール
6	交流協定締結	学校訪問
8月	韓国についての話(2年から1年)	授業
	自己紹介のやりとり	電子メール
9月	スカイプ接続確認	スカイプ
	質問内容の事前確認	電子メール
9月	2015年度1回目の交流	スカイプ
11月	2回目の交流計画提案	電子メール
12月	指文字表のやりとり	電子メール
12月	スカイプ接続確認	スカイプ
12月	2015年度2回目の交流	スカイプ
2016年3月	2016年度の交流計画提案	電子メール
7月	韓国についての話(2年から1年)	授業
	自己紹介のやりとり	電子メール
7月	スカイプ接続確認	スカイプ
	質問内容の事前確認	電子メール
7月	2016年度1回目の交流	スカイプ
12月	オリンピッククイズのやりとり	電子メール
	スカイプ接続確認	スカイプ
12月	2016年度2回目の交流	スカイプ

※   は、生徒同士の交流活動

## 3 交流学習の内容

## (1) 2014年度の交流

交流学習1年目ということで、両校とも手探りの状態で始まった。1回目は、名前や好きなこと、趣味について紹介し、質疑応答をした。2回目は、お互いの学校行事を紹介し、本校の体育祭で演技をするソーラン節を一緒に踊った。また、無料通信アプリLINEの翻訳チャット機能を用いて質疑応答を行った。3回目は、本校職員4名がソウル聾学校を訪問した際に実施し、日本の伝統的な遊びの紹介や画面越しでの折り紙やけん玉をしながら伝統的な文化に触れることができた。

## (2) 2015年度の交流

1回目は、前年度と同様に自己紹介と質疑応答を行った。2回目は、お互いの国の指文字を紹介したり文化についてのクイズを出し合ったりした。事前に本校生徒が作成したハングル対応の日本の指文字表を確認しながら名前を表現した。母音と子音で成り立つハングルの仕組みについても知ることができた。お互いの国の文化についてのクイズは、梅干しやキムチなどの実物や、様々な写真を用いて行った。また、両校の学校行事への取り組みについて紹介し合った。本校の生徒は、文化祭でまとめたお金についての展示発表を、ソウル聾学校の生徒は韓国の映像コンテストで賞を受賞した自作映像作品をそれぞれ紹介した。



図3 ハングルで表した日本の指文字表



図4 ソウル聾学校からのクイズに答える様子



図5 指文字での自己紹介

#### 4 交流学习の成果

##### (1) 生徒の感想（2015年度）

2回の交流について生徒に感想を尋ねたところ、「1回目と比べて2回目は緊張している様子が見えなくなった」「もっと日本の文化について紹介したい」「韓国語と日本語で似ている手話表現があり通じやすかった」「ゆっくり話したり、身振りも加えたりしたことで伝わりやすくなった」「文化は違っても、伝えようという気持ちが大切だということが分かった」など、交流を重ねることでお互いの文化についての理解が進み、コミュニケーション方法の工夫ができていたことが分かった。

##### (2) 生徒の意識の変化

ソウル聾学校との交流で学んだことや、変化した考え方について尋ねたところ、「耳が聞こえなくても、言葉は通じなくても伝わるのが分かった」「聴

覚障害があり更に海外との交流となると、コミュニケーションをとることが難しいと思っていたが、身振りや手振りでも伝えることができた」「海外にも聾の中学生がいるのだなと思った」「他の国の手話も学んで、たくさん話してみたい」など、障害や言語を越えて通じ合う気持ちの大切さを感じたことが分かった。

##### (3) 3年間の交流を通しての生徒の変化

3年間の交流を経て、日本と韓国それぞれの学校で生徒の変化が見られた。生徒たちの交流活動の様子や、事後のアンケート結果を通して、教員側の視点から気がついたことを述べる。

###### ① ソウル聾学校中学部

- ・ 日本文化に対する興味と関心が高まった。
- ・ 日本に対して親しみの持ちが高まり、友好的な見方になった。
- ・ 日本の友だちができたことで、日本語への興味が出てきた。

###### ② 本校中学部

- ・ 韓国の文化や言葉への興味が高まり、韓国に関するニュースにも敏感になった。
- ・ 交流を経験した先輩から後輩へのアドバイスによって、コミュニケーションの幅が広がった。
- ・ 積極的に英語でコミュニケーションをとるようになった。

##### (4) 3年間の交流を通しての教員の変化

交流1年目は、両校とも国際交流担当の教員が日程調整や交流活動内容の企画や準備等を行った。2年目以降は、国際交流担当が日程調整や事前の質問等の交換、機器の設置等を行い、学年担当の教員が交流活動内容の企画や準備、生徒への指導等を行うようになった。双方の学校において、中学1年生同士が交流を行うことで、国際交流に関わる教員が毎年交代し、多くの教員が関わるようになってきた。それぞれの学校での、交流学习に関する教員の関わり方や準備の仕方などの変化を述べる。

## ① ソウル聾学校中学部

- ・ 交流の準備のための時間があまりとれず、言葉が違うため心配していたが、生徒たちが楽しそうに交流してくれたので、やりがいを感じられるようになった。
- ・ 始めはEメールで連絡を取っていたけれど、最近は無料通話アプリ（kakao Talk）やSNSを使っているため、とても便利になった。
- ・ 交流の担当が毎年変わって、業務の引き継ぎが難しかったが、学校全体に日本との交流が広がってきた。
- ・ 新しく校長先生が就任したときなどに、挨拶を交わせたことで、学校同士の結びつきが強くなったように感じた。

## ② 本校中学部

- ・ 国際交流の担当者だけでなく、学年の担任と協力して準備や企画を進めていけるようになった。
- ・ 時間帯によって、校内のインターネット回線の繋がりが悪くなることが分かり、昼ごろの時間にかからないように交流の時間を早めた。
- ・ 12月に行う2回目の交流の内容は学年に任せているため、学年独自のアイデアや、11月に行われる文化祭での取り組みが活かされるようになってきた。

## 5 まとめ

3年間の国際交流を通して、生徒たちは自国や他国の文化を理解し大切にしながら、積極的にコミュニケーションをとる態度を養うことができた。

また、1年次での交流学习をきっかけとして韓国語だけでなく英語などへの関心、学習意欲も高まった。さらに、海外への興味も広がり、海外からの学校訪問の際や、3年次での京都・奈良への修学旅行の際には、筆談やジェスチャーなども用いて自ら進んで英語で話しかける様子も見られた。国際交流を経験した生徒たちは、分かり合いたいという気持ちを持ち、コミュニケーション方法を工夫することで、言葉や文化の違いを越えられることを実感できた様子であった。



図6 修学旅行にて英語でインタビューをする様子

国際交流学习を行う際には、交流の継続と校内での理解が課題として挙げられることが多い。本校の場合、学校間で交流協定を締結することで交流の継続が確保された。また、両校共に国際交流の担当者と中学1年の学年担任が交流学习の計画を立てる体制を整えることで、お互いに情報交換をしながら準備や交流学习を進めることができるようになった。

今後は、生徒間の交流だけでなく教員間の交流や研修を進めていき、グローバル化に対応できる資質の育成に努めていきたい。

## 〔謝辞〕

今回の交流学习を進めるにあたり、多大なるご協力を頂いた筑波大学の鄭仁豪先生と、筑波大学大学院生の金恩河さんに心から感謝いたします。

## 〔付記〕

本研究は、平成28年（2016年）第50回全日本聾教育研究大会附属大会、第14分科会（国際教育・国際交流）で発表した内容に加筆したものである。

## 〔参考文献〕

眞田里佐・佐坂佳晃（2015）韓国国立ソウル聾学校訪問. 聴覚障害, 70(1), 60-65.

眞田里佐・藤田正樹・徐 基弘（2016）

韓国国立ソウル聾学校との国際交流. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要, 38, 46-51.